
運命の赤い糸

がまがえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の赤い糸

【Nコード】

N7599B

【作者名】

がまがえる

【あらすじ】

夢を見ない男と夢に憧れる女。この女によって男の心は少しまた少しと変化させていった。

プロローグ（前書き）

がんばって書くのでアドバイスや感想お願いします!!!

プロローグ

「あんだなんか大っ嫌い！！別れる！！！」

俺と付き合っていた女は俺にビンタを喰らわした後、大声をあげて走り去った。

その場所にいた人達が俺に注目すると同時に、ひそひそと何か話す声やクスクスと笑い声が聞こえる。

だが、俺はそんな事どうでもよかった。

フラれた事がショックだった訳じゃない。むしろその事の方がどうでもよかった。

ただ、意味のわからないやるせなさが俺をイライラさせた。

ポケットに手をつ込んだまま、俺を笑う声と道行く人達の楽しそうな声の中を、一人立ち尽くしていた。

第一話　白井　美沙

次の日、俺はいつも通り学校へ行った。

学校へつくといつものように賑わっていた。

朝練する体育系の部の声、通行途中の生徒の声。

いろんな声が俺の耳に入る。

俺はそんな声をうざったく思いながら教室へ向かった。

教室へ行く途中、いろんな奴が俺の顔をちらちらと見ながらひそひそ話していた。

おおかた、昨日の事がもう知り渡っているのだろう。
他にそんな事をされる覚えはない。

フラれた事はどうでもいいが、その事でうるさくなるのはムカつく。

俺は少し不機嫌になりながらも教室向かうと、教室の前に付き合っていた女がいた。

名前は美香。

美香も気付いたのかこっちを睨むようにじーと見てきた。

俺は美香には目もくれず、無視して平然と通りすぎ教室へ入った。

教室に入ると俺はみんなの注目をあびた。

全員知ってるのか、とイラ立ちながら自分の席についたら、俺が平然と通りすぎたせいか、美香が廊下で何か騒いでいた。

周りの女になだめられながら美香は、わざとか知らないが俺の名前を連発していた。

まあ、俺はうるさいとしか思っていなかったが。

女達がなだめて美香の声もあまり聞こえなくなった頃チャイムがなった。

騒がしかった廊下や俺の方をちらちら見ながらひそひそ話をする奴らも静かになり、俺はようやく落ち着いていた。

先生が教室に入って来て授業がはじまったと同時に、何やら右から服を引っ張られた。

「お前、柏木と別れたんだって？」

などと俺が今一番ムカつく話題をぶつけてきたのは、隣の席の和田一樹だ。

一樹は幼稚園から一緒に家も近いしよく遊んだ。

今では親友で、俺が一応信頼できる奴だ。

俺は、いかにも不機嫌そうな顔をして一樹を睨んだ。

一樹はそんな俺におかまいなしにしつこく聞いてきた。

「別れたよ。フラレた」

なんて、俺はしつこい一樹にだるそうに答えた。

フラレた時は全然どうでもよかったが、いざ自分で口にすると物凄く腹が立った。

顔にも俺の不機嫌さが浮き出ていた。

一樹も何か感じとったのかそれ以上何も聞かなかった。

そして授業は淡々とすんで休み時間も何もする気がなかったので、教室で寝た。

そんな感じで昼食の時間がやってきた。

俺のたった一つだけの楽しみだ。何も興味を示さない俺だが、飯だけは大好きだった。

この時間だけはイライラとは反対にウキウキ気分になる。

いつも昼食は美香と食べていたが、別れたので美香と付き合う前に一樹と食べていたので、一樹と食べる事にした。

一樹も軽くオーケー。

で、いつも食べる屋上へ向かった。

廊下はみんなも昼食の時は少し陽気になるのか、いつも騒がしい。

昼食の時の俺は騒がしいのは気にしない。

屋上へつきドアを開けると、先客がたくさんいた。

まあいつでも屋上は広いからどうとでもなる。

俺は隅の方で食べる事にした。

向かうと誰かが俺を呼んだ。

「天海 聖!!!!」

誰だ?と俺は声の主を見て思った。

見たこともない女だ。

何で俺の名前を知ってる。

わかる事は制服を着てるからこの学校の生徒だと言うことだけ。

「私、白井 美沙。よろしくね!!」

自分の名前を呼ばれて唖然としていた俺に、その女は近寄ってきて

子どものような無邪気な笑顔で言った。

俺は動揺した。

今、会ったばかりの全く知らない女にどうよろしくしろというのだ。

動揺する俺に何か気付いたように美沙は俺の顔を見た。

「あれえ、もしかして私の事知らない？」

俺はゆっくり頷く。

「そっかぁ…。」

美沙は落ち込んだと思えばいきなり喋り始めた。

「でも、私は天海君の事知ってるよ」彼女と別れた事も、付き合い始めた日も、今まで付き合った人とか、運動嫌い勉強嫌い、うるさいのも嫌いだし怒りっぽい」後：「ごはんが大好き」

美沙は俺の知ってる事を次々と言って、全部当てて、最後にまた無邪気な笑顔を見せた。

俺は、まだ動揺していた。

というか早く飯を食べたかった。

そんな俺をほって一樹はもう飯を食べていた。

「じゃ、私行くね」

困る俺に気付いたのか用事が知らないが、美沙は屋上から出ていった。

なんだったんだ。

何で屋上にいた。

俺に会うためにか？いや…それは確実だな。

なんて、いつもならそんな事どうでもいいはずなのに何故か気になった。

俺はよくわからないが、まあ弁当を食べようと思い一樹のところへ行こうしたら、美沙がいた場所に何か落ちていた。

「生徒手帳……」

俺は拾い上げて口にこぼした。
そして何気無く開いた。

二年B組 白井 美沙

「二年だったのか…」

俺は三年である。
今年で18だ。

二年なら俺より一つ下か、と思いながら生徒手帳を閉じ、ポケットにしまい届けてやる事にした。

これなかったら何かと大変だから、これは親切心だ。
などと、何故か知らないが心の中で言い訳をしながら。

そして、やっと食べれると思い一樹のそこへ行つた。

「何話してたんだ？」

一樹は物を頬張りながら俺を見た。

俺は一樹の横腹を軽く蹴った。

先に食べていた仕返だ。

一樹は口に含んだ物が出るのを必死に抑えた。

「ただの世間話だよ。」

「う…はあはあ…。お前ひでえ」

一樹はよほど苦しかったのか、俺の言葉を聞かずに涙目になっていた。

俺はほっとき弁当食べた。

あー…うめえ

そして弁当を食べ終り、午後の授業も何も起こる事なく終った。

俺は何もする事もないしやっと帰れると思い、さっさと学校を出た。
一樹は俺と家が近いが、登下校は付き合っていない時はいつも一人だった。

そして今日も一人で帰る。

俺も思えば今年で18。来年、卒業だ。

進学する気もないし、したい事もないので、俺はとにかく就職しようと考えていた。

そんな事を考えながら、道を歩いてると声が聞こえてきた。

声が聞こえた場所は、少し大きい池のほとりにある東屋だった。

話しているのは老人達だった。

ここは静かで落ち着くから、老人にはもってこいの溜り場だった。

俺は何気なく東屋を見た。

何か聞き覚えのある声が聞こえたからだ。

歩きながら角度を変えて見ると、老人にまざって一人の同じ学校の制服を着た女が楽しそうに話していた。

どこかで聞いた声だと思ったら、声の主は俺のポケットに入ってる生徒手帳の持ち主。
白井 美沙だった。

俺は立ち止まった。

おかしい女だ。

こんな所で老人達と楽しそうに話してるなんて…。

見た目も明るく活発そうなイメージだったのに、なんて考えながら俺は苦笑した。

そして、ポケットから生徒手帳を取り出し、考えた。

明日渡そうと思ったけど今渡そうか…。

だが、あの輪に入りたくない…。
明日渡すのも面倒だし。

俺は間を取って投げる事にした。

生徒手帳の何も書かれてないページに
「感謝しろ」と一言書いて、投げた。

「イタッ！」

見事命中!!

俺は小さくガッツポーズして、見付からずに家へ帰った。

その時の俺は、名前は書かなかったにしろ、何故あんなメッセージを残したのか考えもしなかった。

第二話　メッセージ（前書き）

アドバイスお願いします♪

第二話　メッセージ

翌日、俺はある異変に気付いた。

俺の生徒手帳がない。まさか…落とした…。

俺はありとあらゆる所を探した。

だがどこにもなかった。

落としたにちがいない。

だが、そこまで焦らなかったが、白井　美沙が頭をよぎった。

もし、あいつが拾ってたら…なんて考えただけでも顔が赤くなった。

大丈夫だ…まだどっか落ちてるかもしれない…。

俺はすぐさま家を飛び出て、昨日通った道をゆっくりとじっくりと見ながら学校へ向かった。

そして、生徒手帳は見付かる事なく学校へついた。

と…誰かが校門で立って俺を見てる。

白井 美沙だ。

俺は、怖いような恥ずかしいような引き吊った顔で赤くなった。

そして、美沙は近付いてくる。

俺はいつそう赤くなる。

美沙は立ち止まる俺の前に来て望んでない言葉を言った。

「天海君の生徒手帳、昨日拾ったんだ。」

いたずらっぽい無邪気な笑顔で、美沙は生徒手帳を出し、俺の目の

前でひらひらとゆらした。

確実に俺の生徒手帳だった。

俺は生徒手帳をさっと奪い取り、さっさと学校へ入った。

そんな俺を追い掛けて来て、美沙はちよつと離れた所で
「感謝しろ」と俺に聞こえるように言った。

俺は恥ずかしく確実に赤くなつてると自分でもわかった。

そして、チラッと美沙を見た。

美沙は、自分の生徒手帳を俺に見えるように振りながら、無邪気な
いたずらっぽい笑顔で俺をみていた。

俺は感じた事のないほどの恥ずかしさに、真っ赤になったまま急い

で教室へ向かった。

そして、教室のドアを開け、勢いよく閉めた。

教室のみんなが音にびっくりして、俺の方を見る。

多分、みんな

「え？」と同じ事を考えただろう。

ゆでダコ状態の俺がそんな音をだして、入ってきたのだ。

何も知らない奴らは、怒ってるとしか思わないだろう。

俺はそのまま席についた。

周りの状況を考える余裕はなかった。

俺はすぐさま、机に両腕を置きその真ん中に顔を埋めた。

落ち着け…落ち着け俺…。

何度も何度も頭の中でその言葉を繰り返した。

と…その時、隣から一樹が俺の服を軽く引つ張った。

それに気付き、俺はゆっくりと顔を片目だけ見えるように一樹の方を見た。

「なあに、怒ってんだよ?」

「…怒ってる? 誰が?」

「お前だよ、お前」

「お…俺?」

俺はその時やっと周りの視線に気付いた。

「お…俺は…別に怒ってねえ!!」

俺は何故か立ち上がり叫んだ。周りはみんな驚いた表情だ。

当たり前だろう。

いきなり立ち上がり叫ぶだけでもおかしい事なのに、俺みたいなあまり騒ぐキャラじゃない俺が急に叫んだのだ。

驚くのも無理はない。

教室の中みんなを注目させていた時に、先生が入ってきた。

みんなはゆっくりと俺から目を離した。

俺は授業なんて、まったく耳に入らなかった。

そして授業が終り、俺は学校をサボる事にした。

休み時間になった瞬間荷物をまとめて教室を出て校門まで行った。

と…後ろから声がかかる。

「あれ、帰るの？」

この声…また…

「…何でお前またいるんだ!？」

俺の予想通り声の主は美沙だった。

美沙の方を見て、俺は怒鳴った。

美沙は平然と俺に近付き、手を掴んだ。

「私も一緒に帰るよ」

意味が分からん…。

何を言ってるんだこの女。

言い返す気力もなくなった俺は、美沙の手を振り払いさっさと家への道を歩いた。

美沙は

「ねえねえ」と少し後ろについてきながら俺を呼び続けた。

俺は無視して歩いてたら、いつのまにか家の近くの池まで来ていた。

だが、美沙は一向に帰る気配がない。

それ所か、まだ

「ねえねえ」と呼び続ける。

俺はだんだんマジにムカついてきた。

「なんなんだよ！？さっきから！！意味わかんねえんだよ！！帰れよ！！」

俺は切れて、美沙を怒鳴りちらした。

美沙は、ほっぺたを膨らまして涙目になった。

「ひどい…。怒らなくていいじゃん…。天海君が無視するからいけないんですよ…」

美沙はいじけたように口にこぼした。

「はいはい…。早く帰れ」

俺はそんなのほっというて家へ向かった。

さすがに美沙もついてこずにちょっと遠くから
「バカバカバカア！！！」なんて叫んでいた。

子どもか…。

ふざけんな…誰がバカだ…。

バカはお前だろ…。

ムカつく。

まじ意味分かんねえ…
つか…年下だろ…

俺は今までで一番ムカつきながら、家へ入った。

鞆を玄関に放り投げて、階段をどすどすと登り、自分の部屋へ入ると、勢いよくドアを閉めた。

そして、なんとなくポケットから生徒手帳を取り開いた。

すると、生徒手帳のちょうどメモゾーンの一枚が目印をつけてるみたいに折り曲がっていた。

俺はそのページを開いた。

そこには

「好きです。付き合ってください。」とその言葉だけが大きく書かれていた。

第三話　森

俺は一人、布団の中で生徒手帳のメッセージをみていた。

好きです…付き合ってください…

誰が書いたんだ…って、あいつしかいないか…

いや、でももしかしたらあいつじゃないかも…

今日は学校を抜け出してからこの繰り返しだった。

あいつとはもちろん白井　美沙だ。

俺は興味のあるわからない事は徹底的に調べないと気が済まなかった。

もちろん恋には興味なかった俺だが、恋じゃなく、誰が俺の生徒手帳にこれを書いたのかという事だけに気がなった。

どう調べる…

直接あいつに聞く…って、そんな事できるわけがない。

そんな事をずっと考えても全然いい案が浮かばない。

気が付くともう昼の1時だった。

いつのまに…学校なら飯食い終わってる時間じゃんと思ったら急に腹が減ってきた。

「飯食べよ」

俺はゆっくり布団から抜け出した。

そして、ある事を思い出した。

鞆を投げた

それは俺にとって、とても重大な事だったのだ。

何故かというと、あの中には弁当が入ってる。

俺はすぐさま下に降り鞆をあさり弁当を取り出した。

中は少しぐちゃぐちゃになっていたが、食べれる事にはちがいない。

そして、至福の時を過ごした。

食べ終り、俺は気分転換にどこかへ行く事にした。

制服を脱ぎ、ジーパンに白い半袖、俺はそんな服装で家を出た。

気分転換と行っても行く所はいつも同じ場所。

近くの森だった。

この森は誰かの物らしく、いつも森の周りには柵があり立ち入り禁止の札が張られていた。

初めて入ったのは五年前。

まだ俺が12歳の時の春、原因は忘れたが泣きながら家出をして森にきた事があった。

この森は小さかったが、木がびっしりとはえていて、真ん中辺りは少し木がない空間がある。

そこからだと空以外の外の景色はまったく見えなくなる。

時々鳥が鳴いたり、朝や昼は太陽の光がやさしく入り込む自然な世界に、夜は月の光がやさしく入り込み、さらに空に星が浮かぶ幻想的な世界に。

その空間はまるで別の世界にいるみたいになるのだ。

夜に家出した12歳の時の俺は泣くのを忘れて、その幻想的な世界に感動していた。

その5分後、俺の母親がきたない服にエプロンをしたまま俺の名を呼んでいた。

俺は何故か自分のしてる事が急に恥ずかしくなって、母の元に帰った。

母は

「ごめんね、ごめんね」と俺の頭を撫でながら泣いていたのを覚えている。

俺には父親がいない。

だから母親が仕事している。

母の仕事はキャバクラ。

だから家にいる時以外、見た目にはとても気を使っていた。

隣の家に回覧番を渡しに行く時だけでも、わざわざ服を着替えて化粧していたほどだ。

そんな母が、きたない服にエプロンまでしてすっぴんの顔で俺を大声で探してたと思うと、今でも自分に腹が立つ。

その日から、俺は母に迷惑もかけていない。

森にも時々行くようになった。

俺は森に入り、真ん中で目を瞑り寝転がった。

自然に囲まれて、うとうとと寝そうになっていたら、足音が聞こえた。

俺は無視した。

「天海くん……」

俺に近付き声をかけたのは美沙だった。

美沙は俺の横にゆっくりと座った。

俺は無視し続けていたら、いつのまにか寝てしまった。

「ん…」

俺は少し肌寒くなって目を覚ました。

辺りは少し暗くなりはじめていた。

そろそろ帰ろうと思い、体を起こすと何かが腹の上に被せるように置いてあるので拾いあげた。

「制服…？」

腹に被せられていたのは俺の高校の女子の制服の上着だった。

そして、拾いあげたさいに紙が一枚その制服から落ちた。

紙には

「明日返してね。みさ」と書かれていた。

俺は辺りを見回した。

美沙がいるかと思ったからだ。

だが、いない。

俺は紙をジージパンのポケットに入れて、制服を持った。

そして、家へ帰った。

家のドアを開けると、何やら騒がしかった。

どうやら母が暴れてるみたいだ。

俺は恐る恐る台所の戸を開けた。

「聖！どこ行ってたの！？ごはんはそこにあるから！あー遅刻するー！！」

母はあたふたあたふたしながら、仕事へ行く準備をする。

俺は飯なら自分で作れるからいいのにといつもながら思う。

母は仕事上、夕方に出勤して朝早くに帰ってきて寝る。

そのため、自分の朝飯、弁当、母の昼飯を俺が作る。

他の家事、洗濯、掃除も俺がやる。

晩飯と買い物も俺がやると言ったら母は

「それだけは私がやる！！」と言って母がやってる。

俺が椅子に座って晩飯をさっさと食べ終わっていたら、母がいつてきまーすと言って家を出ていった。

そして俺は、家に一人になる。

俺は立ち上がり、玄関に持っていた美沙の制服を適当に投げて、自分の部屋へ行った。

自分の部屋に入り、生徒手帳とポケットに入ってる紙を取り出した。

「好きです。付き合ってください。」

「明日返してね。みさ」

二つのメッセージを見比べて、同じ奴かどうか見分けようと思ったのだ。

だが、そんな事しても俺にはわからなかった。

俺はちつと舌打ちして生徒手帳に紙をはさんで部屋にある机に置いた。

あいつに直接聞いて

「好きです。付き合ってください。」がもしあいつじゃなかったらかなり恥ずかしい。

けど気になる。

そして俺は決心した。
直接聞く。

もしちがうんだっ
たら逃げよう。

そう決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599b/>

運命の赤い糸

2010年10月19日02時53分発行